

瀬田のため池調査について

吉村 文成

2006年度年次報告書で報告した『「畠田（はたけだ）」の発見—大津市瀬田地区のため池調査から』について、吉村が調査過程でぶつかった未解決の問題を中心に報告、意見を交換した。提起されたのは、以下のような課題であり、今後さらなる調査、検討が求められる。

①瀬田山はどの程度利用されたか？

吉村の調査では、江戸時代、燃料の採取、茸類の採集などに瀬田丘陵が地元住民らによって十分に利用された痕跡が感じられない。仮説的理由としては、膳所藩がかなり強く独占管理し、住民には必ずしも十分に開放していなかったことが考えられる。

②南大萱の田地面積は、幕末1861年から明治維新後の1877年までの16年ほどのうちに、79町歩から194.5町歩へと、記録的ともいえるほどの増大を示している。幕末から明治への混乱の中で画期的な技術開発があったとは考えにくく、この耕地面積の増大は、どのように説明できるか。なお、畑地面積は、同期間に62.4町歩から48.3町歩に減少している。また、里山ORC客員研究員の秋津元輝氏によると、この時期の田地の増大は、日本各地で観察されるという。

これについては、江戸時代の「隠し田」が明治維新後、表面化したという意見が研究会では有力であった。しかし、明治政府の苛斂誅求ともいえる厳しい増税政策、コメ生産に対する意識の高まりなど広い視点からさらに検討する必要がある。

③「本田」と「畠田」の生産量、等級、売買価格はどうなっているか？

未調査だが、比較的手をつけやすい課題である。なお、当然のことだが、水田としての価格は「本田」が「畠田」に比して高い。ただし、宅地としての価格は、その逆になる。

④「畠田」が瀬田地区で発展したのはなぜか？ それは何を意味するか？

秋津氏は、「近世初期の瀬田は、琵琶湖の船便なども担い、『百姓』として豊かだった。しかし、江戸時代にはいって農業に閉じ込められることで貧しくなり、畠田の開発が始まった」との仮説を示している。かなり正鵠を射た洞察といえよう。畠田は降雨量の影響を受けやすいという点で限界的な水田である。畠田の開発は、むらの発展であり膳所藩としては生産高の増加であったが、同時に、人々の暮らしという面では貧困化を意味している可能性が高い。

⑤「畠田」は、「低地から高地へ向けて」「ため池と水路網の造成という手法を用いて作り出された」「尾根筋の水田化」ととらえることができる。瀬田地区の特異な地形が生み出した水田であるが、ほんらいなら水源あるいは里山としての利用価値がある尾根筋を、わざわざ限界的ともいえる水田に切り替えたのは、どのような理由によるのか？

上記④、①とも関連するが、仮説としては、瀬田山が基本的に膳所藩に独占管理されていたこともあって、地区に山林利用の発想が乏しかったことが一因としてあげられるのではないか。この地区に限っていえば、「むら」はもともと耕地や肥料などを琵琶湖と平地水田（本田）に依存しており、山林はそれほど利用されていなかった可能性が高い。そのことが、近辺の山林をある種の未開発地とみなし、「畠田」の開発に向かわせたことが考えられる。

山林（里山）とむらとの関係は、人々の意識の中ではむらの日常生活を補完する「共生」という側面と、危険な未知の世界という「敵対」の側面とがあり、時代とともに変遷してきていることを認識する必要があるだろう。